

## イザヤ書36－39章「主の宮から離れない者」

### 1A アッシリヤからの救い 36－37

#### 1B 生ける神への誹り 36

##### 1C 肉の弱さ 1－10

##### 2C 主に拠り頼む意味 11－22

#### 2B 主の怒り 37

##### 1C 出産できない赤子 1－7

##### 2C 他の神々との同列 8－20

##### 3C 高慢の後の滅び 21－35

##### 4C 御心の実現 36－38

### 2A ヒゼキヤの晩年 38－39

#### 1B 伸ばされた寿命 38

##### 1C 神の許容 1－8

##### 2C 回復の歌 9－22

#### 2B バビロン捕囚の予告 39

## 本文

イザヤ書 36 章を開いてください。私たちはついに、前半の預言の部分を前回読み終えるができました。36 章と 37 章は、それらの預言の背後にあった歴史的な出来事です。ヒゼキヤ王が主の宮に行って祈りを捧げるところがその内容です。彼はイザヤによって、神の言葉を受け取っています。ヒゼキヤは、イザヤによる神の言葉をずっと聞いていた人であり、それゆえ、心の中に葛藤を持っていた人でした。彼の葛藤は、まさにこれまで語られていたイザヤ書の言葉を映し出しています。例えば、エジプトに頼ったために、災いがかえって近づくであるとか、主に拠り頼みながら、近くにいる側近の意向を聞いてしまい、エジプトという目に見える物に引かれてしまったであるとか、そうした過ちもあります。しかし、主が憐れんでくださり、救いを与えられます。イザヤの語った様々な預言が、ヒゼキヤという人物の中で成就し、つまり私たちの生活にもこれまでの神の勧めをいかに受け入れていくのか、考える時になります。

### 1A アッシリヤからの救い 36－37

#### 1B 生ける神への誹り 36

##### 1C 肉の弱さ 1－10

36:1 ヒゼキヤ王の第十四年に、アッシリヤの王セナケリブが、ユダのすべての城壁のある町々を攻めて、これを取った。36:2 アッシリヤの王は、ラブ・シャケに大軍をつけて、ラキシユからエルサレムに、ヒゼキヤ王のところへ送った。ラブ・シャケは布さらしの野への大路にある上の池の水道のそばに立った。

紀元前 701 年のことです。セナケリブは、地中海沿いに南下して、それから北東にあるユダの町々を倒していき、南西からエルサレムに近づきました。そして、南南東 50 キロぐらいのところにある、要塞の町ラキシユに王は来ます。そこで何を行なったかは、ニネベで見つかった板の絵の中に出てきます。兵士たちが串刺しにされている姿、皮を剥がされている姿です。



その町から、ラブ・シャケをセナケリブは遣わします。(「ラブ・シャケ」というのは、名前ではなく役職の名称です。)そして彼が立ったところは、「布さらしの野への大路」です。ここはまさに、かつてイザヤが、北イスラエルとアラムによって脅威を受けていたアハズに会ったところです。覚えていますか、彼らは襲ってくることはない、と約束しました。しかしアハズはそれを信じられず、アッシリヤに援軍を頼みました。このような不信仰のゆえ、ユダにまでアッシリヤが押し寄せて来ているのです。さらにヒゼキヤ自身も、エジプトの助けを求めて過ちを犯しているのですから、自分の蒔いた種を刈り取ってしまったことを思い出したことでしょう。

36:3 そこで、ヒルキヤの子である宮内長官エルヤキム、書記シェブナ、および、アサフの子である参議ヨアフが、彼のもとに出て行った。

三人の側近ですが、二人は既に出てきており、対照的な二人でした。シェブナは、世的な人で自分の墓の装飾のことを考えて生きていたような人物です。エルヤキムは、忠実に主に仕えた人です。王と言えども、どのような側近がいるかによってその判断や決断が変わってきます。おそらくシェブナがエジプトの助けを得る勧めを強く行なったのであろうと思われます。エルヤキムはその反対に、王に従って、主が語られることを聞いていこうとしていたのでしょう。

36:4 ラブ・シャケは彼らに言った。「ヒゼキヤに伝えよ。大王、アッシリヤの王がこう言っておられる。いったい、おまえは何に拠り頼んでいるのか。36:5 口先だけのことばが、戦略であり戦力だと思いつているのか。今、おまえはだれに拠り頼んで私に反逆するのか。36:6 おまえは、あのいたんだ葦の杖、エジプトに拠り頼んでいるが、これは、それに寄りかかる者の手を刺し通すだけだ。エジプトの王、パロは、すべて彼に拠り頼む者たちにそうするのだ。

<sup>1</sup> [https://en.wikipedia.org/wiki/Lachish\\_relief](https://en.wikipedia.org/wiki/Lachish_relief)

ヒゼキヤの、口先だけの言葉を激しく責めてきました。主に拠り頼めと言っているくせに、エジプトに拠り頼んでいる、という矛盾を付けてきました。私たちの霊の戦いも同じです。敵は、私たちが信仰的に手薄になっているところをよく知っていて猛攻撃していきます。霊の戦いについて、ヤコブは、「神に従いなさい。そして、悪魔に立ち向かいなさい。(4:7)」と言いました。悪魔に立ち向かうには、自分が神に従っている領域をくまなく広げていくということが必要なのです。

36:7 おまえは私に『われわれは、われわれの神、主に拠り頼む。』と言う。その主とは、ヒゼキヤが高き所と祭壇を取り除いておいて、ユダとエルサレムに向かい『この祭壇の前で拝め。』と言ったそういう主ではないか、と。

排他的であり、独善的であるという告発です。すべての救いはイエス・キリストのみにある、という言葉や信仰に対して、独善的、排他的に見えるでしょう。けれども、そこにこそ救いがあるのだ、ということをやザヤは何度も繰り返して教えてきました。アハズのようにアッシリヤに与するのではなく、エジプトに拠り頼んで反抗するのではなく、ただシオンに住まわれる主を待ち望むのです。

36:8 さあ、今、私の主君、アッシリヤの王と、かけをしないか。もしおまえのほうで乗り手をそろえることができれば、私はおまえに二千頭の馬を与えよう。36:9 おまえは戦車と騎兵のことでエジプトに拠り頼んでいるが、私の主君の最も小さい家来のひとりの総督をさえ撃退することはできないのだ。36:10 今、私がこの国を滅ぼすために上って来たのは、主をさしおいてのことであろうか。主が私に『この国に攻め上って、これを滅ぼせ。』と言われたのだ。」

アッシリヤの軍事力を誇りましたが、その通りなのです、エジプトも軍事力、馬の数はありましたが、アッシリヤのほうがはるかに多かったのです。そして、主(ヤハウェ)という神の名を使って、この国を滅ぼすと言っています。主の名を使って、ヒゼキヤやユダの人々を罪定めしているのです。私たち信仰者に対して、悪魔はこのようなことさえます。主の言葉さえ使って、それを歪曲して私たちに罪に定めようとするのです。

## 2C 主に拠り頼む意味 11-22

36:11 エルヤキムとシェブナとヨアフとは、ラブ・シャケに言った。「どうかしもべたちには、アラム語で話してください。われわれはアラム語がわかりますから。城壁の上にいる民の聞いている所では、われわれにユダのことばで話さないでください。」

アラム語は、当時に貿易言語です。今でいう英語です。けれどもラブ・シャケは、ヘブル語を使って話していました。ちなみに、アラム語とヘブル語はとても近いそうです。

36:12 すると、ラブ・シャケは言った。「私の主君がこれらのことを告げに私を遣わされたのは、おまえの主君や、おまえのためだろうか。むしろ、城壁の上にすわっている者たちのためではないか。」

彼らはおまえたちといっしょに、自分の糞を食らい、自分の尿を飲むようになるのだ。」

つまり、包囲されているので食糧に苦しみ、ついに自分の排泄物まで食べるようになるということです。

36:13 こうして、ラブ・シャケはつつ立って、ユダのことばで大声に呼ばわって、言った。「大王、アッシリヤの王のことばを聞け。36:14 王はこう言われる。ヒゼキヤにごまかされるな。あれはおまえたちを救い出すことはできない。36:15 ヒゼキヤが、主は必ずわれわれを救い出してください、この町は決してアッシリヤの王の手に渡されることはない、と言って、おまえたちに主を信頼させようとするが、そうはさせない。36:16 ヒゼキヤの言うことを聞くな。アッシリヤの王はこう言っておられるからだ。私と和を結び、私に降参せよ。そうすれば、おまえたちはみな、自分のぶどうと自分のいちじくを食べ、また、自分の井戸の水を飲めるのだ。36:17 その後、私に来て、おまえたちの国と同じような国におまえたちを連れて行こう。そこは穀物とぶどう酒の地、パンとぶどう畑の地である。

ヒゼキヤは主に抛り頼めと言っていますが、アッシリヤは、捕囚の地で穀物、ぶどう酒、パンにあずかることができると言っています。主に抛り頼むという目に見えない行為か、それとも目に見える必要を選ぶか、ということです。

36:18 おまえたちは、ヒゼキヤが、主がわれわれを救い出してくださいと言っているのに、そそのかされないようにせよ。国々の神々が、だれか、自分の国をアッシリヤの王の手から救い出したのだろうか。36:19 ハマテやアルパデの神々は今、どこにいるのか。セファルワイムの神々はどこにいるのか。彼らはサマリヤを私の手から救い出したか。36:20 これらの国々のすべての神々のうち、だれが自分たちの国を私の手から救い出したのだろうか。主がエルサレムを私の手から救い出すともいうのか。」

ここです、この言葉が主の怒りを引き起こしました。他の国々で拝まれている神々と、ご自身をアッシリヤが同列に置いたからです。私たちは常に、偶像に取り囲まれています。それは、地蔵などの像とは限らず、主の与えられたあらゆる良い物を、主ご自身以上に大切にしてしまうことです。主が家族を与えられました。けれども、神を第一とするときに家族がいるからそれはできない、ということであれば、家族を偶像にしています。安定した仕事があれば、その会社が偶像になります。自分の能力も偶像になりえます。もちろん、あらゆる貪りは偶像礼拝そのものです。今の言葉で言えば、「依存しているもの」これらは偶像です。

しかし主は、時に、アッシリヤのように、これらの大切なものが神々ではないことを示されるために、そういったものを無くされます。ある出来事かもしれないし、ある人かもしれないし、ある国かもしれないし、そのことを通して、主こそ神であることを明らかにしておられるのです。しかしアッシリ

ヤは、それらの偶像と同じように、エルサレムの神もアッシリヤによって倒されるのだぞ、と言っているのです。主ご自身の栄光を、他の偶像と同じ位置に引き起こすこと、これは絶えず悪魔は行なっています。「イエス様に従ったところで、他の信じていない人々が頼っているのと同じではないか。」という声であります。イエス様に従うことは、現実逃避しているのではないか、弱い人がすることではないか、というようにその地位と栄光を引き下げようとするのです。

36:21 しかし人々は黙っており、彼に一言も答えなかった。「彼に答えるな。」というのが、王の命令だったからである。36:22 ヒルキヤの子である宮内長官エルヤキム、書記シェブナ、アサフの子である参議ヨアフは、自分たちの衣を裂いてヒゼキヤのもとに行き、ラブ・シャケのことは告げた。

ラブ・シャケに答えるなというのは、悪魔に対して答えていけないという言葉として受け入れることができます。蛇がエバを感わした時、彼女は返答してしまったので感わされました。そして、一言も答えなかったのも、側近たちは悲しみと嘆きを、衣を裂くことによって示しました。

## 2B 主の怒り 37

### 1C 出産できない赤子 1-7

37:1 ヒゼキヤ王は、これを聞いて、自分の衣を裂き、荒布を身にまとって、主の宮にはいった。37:2 彼は、宮内長官エルヤキム、書記シェブナ、年長の祭司たちに荒布をまとわせて、アモツの子、預言者イザヤのところに遣わした。

午前礼拝で学びました、ヒゼキヤは主の宮の中に入りました。主の宮といっても、もちろん聖所の中に入っていません。そこは祭司たちの領域です。外庭まで行ったのでしょう。そして、預言者イザヤに、先ほどの側近の内二人と、さらに祭司たちを遣わしました。イザヤに対して祈りを求めています。また主の言葉があれば語ってくれるように願っています。ヒゼキヤは知っていました、この時も祈りこそ、また主の約束こそが我々を救うのだということです。

37:3 彼らはイザヤに言った。「ヒゼキヤはこう言っておられます。『きょうは、苦難と、懲らしめと、侮辱の日です。子どもが生まれようとするのに、それを産み出す力がないのです。37:4 おそらく、あなたの神、主は、ラブ・シャケのことは聞かれたことでしょう。彼の主君、アッシリヤの王が、生ける神をそしるために彼を遣わしたのです。あなたの神、主は、その聞かれたことは責められませんが、あなたはまだいる残りの者のため、祈りをささげてください。』」

ヒゼキヤは、今の心の嘆きを三つの言葉で言い表しています。「苦難」は今の現状を、有体に言っています。「懲らしめ」とは、その苦難が神から来ているものと見なしているのです。自分がエジプトに頼ってしまっているばかりに、このような苦境に陥ってしまったという悔いです。それから、「侮辱」はこの苦しみが敵から来ていることを知っているからです。それから、この苦しみのとてつ

もない痛みを、「子どもが生まれようとするのに、それを産み出す力がない」と言い表しています。陣痛は出産があるからこそ耐えられるものです。その痛みは一時的であり、その後に喜びがあるという希望があるからこそ、耐えられます。しかし、全くその見通しが立たない状態での苦しみです。

しかしヒゼキヤは、「神をそしるために彼を遣わした」という本質を見抜いていました。多くの霊の戦いにおいて、その本質を見抜いてください。自分に対する攻撃の多くが、本質的に本人が神に反抗しているためなのだ、ということです。敵は、相手と自分という対立構図を作り出そうとしますが、そうではなく神と相手という対立が本質なのです。そして、ヒゼキヤは大切な言葉を言っています、「残りの者のため」と言っています。イザヤの預言の中に数多く出てきた約束であり、残された者たちに主が救いを備えておられると彼は話しました。

そしてヒゼキヤがイザヤに祈りを要請したように、私たちが祈りをリクエストすることは大切です。パウロは教会の人々に数多く、福音宣教に関して祈ってほしいと要請しました(エペソ 6:19-20)。

37:5 ヒゼキヤ王の家来たちがイザヤのもとに来たとき、37:6 イザヤは彼らに言った。「あなたがたの主君にこう言いなさい。主はこう仰せられる。『あなたが聞いたあのことば、アッシリヤの王の若い者たちがわたしを冒涇したあのことばを恐れるな。37:7 今、わたしは彼のうちに一つの霊を入れる。彼は、あるうわさを聞いて、自分の国に引き揚げる。わたしは、その国で彼を剣で倒す。』」

主の前にへりくだる時に、主は祈りに答えてくださいます。王の動きは、主によって牛耳られており、一つの霊を入れて引き上げるようにさせます。事実、リブナにいたアッシリヤの王はエルサレムに来ることなく、結局、自国に戻ります。

## 2C 他の神々との同列 8-20

37:8 ラブ・シャケは退いて、リブナを攻めていたアッシリヤの王と落ち合った。王がラキシユから移動したことを聞いたからである。37:9 王は、クシュの王ティルハカについて、「彼はあなたと戦うために出て来ている。」と聞いた。彼はそれを聞くと、使者たちをヒゼキヤに送って言った。

主が確かに、一つの霊を入れてセナケリブの戦う方向を変えました。当時、クシュ(エチオピア)が力を持っていました、イザヤ書 18 章で学びました、エジプト王朝のパロにクシュ人が付いていたような時でした。ティルハカは紀元前 701 年の時点ではまだ総督でしたが、後にパロになります。

37:10 「ユダの王ヒゼキヤにこう伝えよ。『おまえの信頼するおまえの神にごまかされるな。おまえは、エルサレムはアッシリヤの王の手に渡されないと知っている。37:11 おまえは、アッシリヤの王たちがすべての国々にしたこと、それらを絶滅させたことを聞いている。それでも、おまえは救い出されるというのか。37:12 私の先祖たちはゴザン、カラン、レツェフ、および、テラサルにいたエデンの人々を滅ぼしたが、その国々の神々が彼らを救い出したのか。37:13 ハマテの王、アルパ

デの王、セファルワイムの町の王、また、ヘナやイワの王は、どこにいるか。』」

ラブ・シャケの言った最後の言葉だけを、ヒゼキヤの直接伝えています。アッシリヤは、征服した国々の神々を打ち壊しながら進んでいきました。それによって、アッシリヤの神こそがそれらの神々よりも優れていることを示していたのです。

37:14 ヒゼキヤは、使者の手からその手紙を受け取り、それを読み、主の宮に上って行って、それを主の前に広げた。37:15 ヒゼキヤは主に祈って言った。37:16 「ケルビムの上に座しておられるイスラエルの神、万軍の主よ。ただ、あなただけが、地のすべての王国の神です。あなたが天と地を造られました。37:17 主よ。御耳を傾けて聞いてください。主よ。御目を開いてご覧ください。生ける神をそしるために言ってよこしたセナケリブのことばをみな聞いてください。37:18 主よ。アッシリヤの王たちが、すべての国々と、その国土とを廃墟としたのは事実です。37:19 彼らはその神々を火に投げ込みました。それらは神ではなく、人の手の細工、木や石にすぎなかったので、滅ぼすことができたのです。37:20 私たちの神、主よ。今、私たちを彼の手から救ってください。そうすれば、地のすべての王国は、あなただけが主であることを知りましょう。」

ヒゼキヤは初め、イザヤに祈りを頼みました。そしてイザヤを通して主からの言葉が与えられました。それを受け入れているのですが、相手の執拗な攻撃に耐えられませんでした。そこで自身で主の前に出て祈ったのです。

そしてその祈りは、主ご自身がどのような方を言い表すものでした。ケルビムの上に座しておられる主、イスラエルの神、万軍の主、そして、地のすべての王国の神、それから天地を造られた方、であります。そして、アッシリヤの王が言ったことも、半分認めています。彼らは確かに神々を粉碎していったのです。しかし、その後が間違っています、エルサレムの神は木や石で作られたのではないからです。キリストをキリストとしてあがめていく、その栄光の大きさをその大きさをもって私たちが祈っているかどうか、試されます。他の神々に対するのとあまり変わらず限界を付けてしまっではいけません。

### 3C 高慢の後の滅び 21-35

37:21 アモツの子イザヤはヒゼキヤのところの人に人をして言わせた。「イスラエルの神、主は、こう仰せられます。あなたがアッシリヤの王セナケリブについて、わたしに祈ったことを、わたしは聞いた。

すばらしいです、すぐに祈りの答えがありました。御心にかなった祈りは、主はすぐに聞いておられます。

37:22 主が彼について語られたことばは次のとおりである。処女であるシオンの娘はあなたをさ

げすみ、あなたをあざける。エルサレムの娘は、あなたのうしろで、頭を振る。

アッシリヤに侵略を受けることを、凌辱されることに喩えています。そこで「処女であるシオンの娘」とエルサレムの住民を呼んでいます。

37:23 あなたはだれをそしり、ののしったのか。だれに向かって声をあげ、高慢な目を上げたのか。イスラエルの聖なる方に対してだ。37:24 あなたはしもべたちを使って、主をそしって言った。『多くの戦車を率いて、私は山々の頂に、レバノンの奥深く上って行った。そのそびえる杉の木と、美しいもみの木を切り倒し、私はその果ての高地、木の茂った園にまでは行って行った。37:25 私は井戸を掘って水を飲み、足の裏でエジプトのすべての川を干上がらせた。』と。37:26 あなたは聞かなかったのか。昔から、それをわたしがなし、大昔から、それをわたしが計画し、今、それを果たしたことを。それであなたは城壁のある町々を荒らして廃墟の石くれの山としたのだ。37:27 その住民はカウセ、おののいて、恥を見、野の草や青菜、育つ前に干からびる屋根の草のようになった。

先に話しましたように、アッシリヤの行なっていることは、主の御手の中にありました。彼らが町々を荒らしているけれども、それは神の許しがなければできなかったことです。しかも、主はそれをご自分の栄光のために、大昔からご計画されていたということです。したがって、そこには主の明らかな御心があります。私たちがそれをどこまで受けとめることができるか？イスラエルの民にとっては、他の国々の神と呼ばれているものは無力なのだということをアッシリヤを通して知ることができるでしょう。神を信じているといいながら、他のものに拠り頼んでいる姿を、アッシリヤの恐怖を通して明らかにしておられたのです。

37:28 あなたがすわるのも、出て行くのも、はいるのも、わたしは知っている。あなたがわたしに向かっていきりたつのも。37:29 あなたがわたしに向かっていきりたち、あなたの高ぶりが、わたしの耳に届いたので、あなたの鼻には鉤輪を、あなたの口にはくつわをはめ、あなたを、もと来た道に引き戻そう。

アッシリヤのしていることは、すべてが知られています。彼らが知らなかったことは、このことでした。高ぶりというのは、自分の人生、自分の生活が完全に神に知られ、神に依存していることを認めないことです。その無知こそが高ぶりであり、神を信じさせないようにする罪です。

そして、主はアッシリヤの高ぶりを裁かれるために、彼らのしたことを彼らが受けるようにされることを話されています。彼らがある征服した民を捕え移す時に、「鼻には鉤輪を、あなたの口にはくつわをはめ」ということです。これは文字通りではなかったかもしれませんが、しかし、それだけの屈辱を味わうことということでもあります。蒔いた種を刈り取ります。

37:30 あなたへのしるしは次のとおりである。ことしは、落ち穂から生えたものを食べ、二年目も、またそれから生えたものを食べ、三年目は、種を蒔いて刈り入れ、ぶどう畑を作ってその実を食べる。37:31 ユダの家ののがれて残った者は下に根を張り、上に実を結ぶ。37:32 エルサレムから、残りの者が出て来、シオンの山から、のがれた者が出て来るからである。万軍の主の熱心がこれをする。

ここはヒゼキヤに対する言葉です。ここでいいたいことは、「城壁の外に出て、畑仕事ができる。そして、自分が育てたものの実を食べることができるほどの平和が戻ってくる。」ということです。種を植えて初めの収穫があるまで、三年弱かかります。しかし、その間も主が必ず落穂などで養ってくださいということです。ハガイ書にも似たようなことが書いてあります。主が回復を与える年には、実を見ることはないけれども、その後で振り返ったら確かにその年のその時であったということが、主の回復の時、新生の時があるということです。同じように、私たちに主は新しい働きを行ってください。それをすぐには見ることはできません、けれども実を必ず結ばせてくれます。

37:33 それゆえ、アッシリヤの王について、主はこう仰せられる。彼はこの町に侵入しない。また、ここに矢を放たず、これに盾をもって迫らず、壘を築いてこれを攻めることもない。37:34 彼はもと来た道から引き返し、この町には、はいらない。・・主の御告げ。・・37:35 わたしはこの町を守って、これを救おう。わたしのために、わたしのしもべダビデのために。」

主は、エルサレムの町を守ってください。それが、主ご自身のため、またダビデのためだと言われます。主は私たちを守ってくださいますが、それは主が私たちを憐れみ、私たちを選ばれたからです。だから私たちが救われることによって、主ご自身の栄光が与えられるからです。そして、ダビデのため、とあります。これは、主がダビデに約束された国のことです。ダビデの世継ぎの子がとこしえの神の国に王となるという約束です。ヒゼキヤが優れているからではなく、ダビデに与えられた、ダビデの子のゆえに救われます。この方はキリストです。私たちは神のゆえに、そしてキリストのゆえに救われます。

#### 4C 御心の実現 36-38

37:36 主の使いが出て行って、アッシリヤの陣営で、十八万五千人を打ち殺した。人々が翌朝早く起きて見ると、なんと、彼らはみな、死体となっていた。37:37 アッシリヤの王セナケリブは立ち去り、帰ってニネベに住んだ。37:38 彼がその神ニスロクの宮で拝んでいたとき、その子のアデラメルクとサルエツェルは、剣で彼を打ち殺し、アララテの地へのがれた。それで彼の子エサル・ハドンが代わって王となった。

この出来事は、出エジプトと並んで、全世界にこの方が神であることを知らしめる大きな出来事となります。今朝読んだ詩篇の箇所 43 篇があったと言われます。8 節からもう一度読んでみます。「詩篇 46:8-10 来て、主のみわざを見よ。主は地に荒廃をもたらされた。主は地の果てまでも戦い

をやめさせ、弓をへし折り、槍を断ち切り、戦車を火で焼かれた。「やめよ。わたしこそ神であることを知れ。わたしは国々の間であがめられ、地の上であがめられる。」「やめよ」という言葉が大事ですね、多くの人は神に逆らっています。心の中で逆らっています。そしてそれが、物理的に世界の軍隊の戦いによってこの世界はクライマックスを迎えます。しかし、主は「やめなさい、わたしこそが神であることを知りなさい。」と言われるのです。

そして、主がアッシリヤの王を裁かれます。彼はあれだけ神々を倒していったと豪語しましたが、自分がアッシリヤの神をあがめていた時に、このように息子たちによって暗殺されてしまいました。二十年後の紀元前 681 年のことです。

## 2A ヒゼキヤの晩年 38-39

そして 38 章に入ります。38 章と 39 章は、実は 40 章から始まるイザヤ書の預言の後半部分の歴史的背景となります。アッシリヤからユダは救われますが、バビロンによって滅ぼされます。約二百年後、紀元前 586 年にエルサレムがバビロンに滅ぼされます。そして 40 章以降は、バビロンからの帰還の約束から始まるのです。そのバビロンとの関わり、その種を蒔いてしまったのが、実に残念なことにヒゼキヤ本人だったということです。ここから私たちは、大きな教訓、戒めを学ぶことができます。

### 1B 伸ばされた寿命 38

#### 1C 神の許容 1-8

38:1 そのころ、ヒゼキヤは病気になって死にかかっていた。そこへ、アモツの子、預言者イザヤが来て、彼に言った。「主はこう仰せられます。『あなたの家を整理せよ。あなたは死ぬ。直らない。』」38:2 そこでヒゼキヤは顔を壁に向けて、主に祈って、38:3 言った。「ああ、主よ。どうか思い出してください。私が、まことを尽くし、全き心をもって、あなたの御前に歩み、あなたがよいと見られることを行なってきたことを。」こうして、ヒゼキヤは大声で泣いた。

ヒゼキヤが病気になりました。もう死ぬ用意をしなさいという言葉が伝わります。しかし、ヒゼキヤはその短命に終わってしまう人生に非常な悲しみをもって主に憐れみを嘆願しています。ここで、「顔を壁に向けて、主に祈って」とあることに注目してください。彼は、主の宮に入ることが病のためできていなかったのです。それで壁に顔を向けています。

38:4 そのとき、イザヤに次のような主のことばがあった。38:5 「行って、ヒゼキヤに告げよ。あなたの父ダビデの神、主は、こう仰せられます。『わたしはあなたの祈りを聞いた。あなたの涙も見た。見よ。わたしはあなたの寿命にもう十五年を加えよう。38:6 わたしはアッシリヤの王の手から、あなたとこの町を救い出し、この町を守る。』38:7 これがあなたへの主からのしるしです。主は約束されたこのことを成就されます。38:8 見よ。わたしは、アハズの日時計におりた時計の影を、十度あとに戻す。」すると、日時計におりた日が十度戻った。

列王記第二 20 章を見ますと、イザヤがこの言葉を告げて中庭を出ないうちに、主がヒゼキヤの癒すことを約束されました。しかも三日目に癒されることまで約束されています(4-5 節)。そして、主は憐れみを示して、十五年間のさらなる寿命を与えられます。その十五年間は、主の憐れみであると同時にそれは、さらに主に仕える十五年間であるということもできます。つまり、自分の命について、主に対して責任があるということです。使徒パウロは、「私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。実はそのほうが、はるかにまさっています。しかし、この肉体にとどまるのが、あなたがたのためには、もっと必要です。(ピリピ 1:23-24)」と言いました。この肉体に留まる時は、教会の人々に仕えることができるから有益だと言っています。何のためにその年月を使うのか？ということが、寿命が延びたということよりはるかに大切なのです。

そして、主はアッシリヤからエルサレムを救い出す約束も与えられました。つまり、今、少し時計の針が戻って、アッシリヤにエルサレムが包囲されている時に起こっていました。そのような危機に彼が死んでしまうというのは、相当の衝撃だったでしょう。しかし、今、主が約束をかなえてくださり、その印として何と日時計を十度戻すところまでしてくださるのです！これは、ヨシュアの時に「日よとどまれ、月よ、とどまれ。」と言った時以来の、ものすごい奇蹟であります。アハズの日時計であることも注目しに値します。父アハズは、しるしを求めよと言われても、主を試さないと言って拒みました。しかし、ヒゼキヤは主の生きた姿をこの目で確かめることを選び、印を求めたのです。

### 2C 回復の歌 9-22

38:9 ユダの王ヒゼキヤが、病気になって、その病気から回復したときにしるしたもの。38:10 私は言った。私は生涯の半ばで、よみの門にはいる。私は、私の残りの年を失ってしまった。

この「人生の半ば」はおそらく 40 歳ぐらいのことでしょう。人生の中で最も何かをしようと思っただけの時です。

38:11 私は言った。私は主を見ない。生ける者の地で主を見ない。死人の国の住人とともに、再び人を見ることがない。38:12 私の住みかは牧者の天幕のように引き抜かれ、私から取り去られた。私は、私のいのちを機織りのように巻いた。主は私を、機から断ち切る。あなたは昼も夜も、私を全く捨てておられます。

彼は陰府に下るので、生きている者たちの地において主を見ることはないと言っています。これはどういうことか？復活の希望がなかったことです。旧約時代においては、復活の希望が希薄でした。ダビデも、「死にあつては、あなたを覚えることはありません。よみにあつては、だれが、あなたをほめたたえるでしょう。(詩篇 6:5)」と言いました。しかし、ヨブが突然こう言ったことがあります。「私は知っている。私を贖う方は生きておられ、後の日に、ちりの上に立たれることを。私の皮が、このようにはぎとられて後、私は、私の肉から神を見る。(ヨブ 19:25-26)」そしてダニエルも、復活してある者は永遠の忌みに、またある者は永遠のいのちに至ることを話しました(12:2)。だからあ

るのですが、しかし希薄です。

それは、まだキリストが贖いを完成されていなかったからです。旧約時代における贖罪は、「罪を覆う」ことであっても、罪を取り除くことではありませんでした。動物のいけにえによる血による罪のいけにえは、人々の良心から罪を取り除くことはできませんでした。唯一、神の御子ご自身の肉体において罪が裁かれ、それで罪が取り除かれたのです。それで、主が死なれた後に陰府に下られ、贖いが完成したことを宣言し、そして天に昇られました。その時に、多くの捕虜を引き連れてとエペソ 4 章 8-9 節に書いてあります。したがって、その時から陰府にいた聖徒たちは、天に入ることができるようになりました。そして復活の希望も明確に始まります。キリストが復活の初穂であり、キリストの内にいる者も復活します。

そしてヒゼキヤが、自分の体を機織りのように例えています。体が衰えて滅んでしまうことに対する嘆きですが、パウロもコリント第二において、今の肉体を天幕に、これからの肉体を神の家に例えました。この体には限界があるのです。

38:13 私は朝まで叫びました。主は、雄獅子のように私のすべての骨を砕かれます。あなたは昼も夜も、私を全く捨てておかれま。38:14 つばめや、つるのように、私は泣き、鳩のように、うめきました。私の目は、上を仰いで衰えました。主よ。私はしいたげられています。私の保証人となってください。

病の中にいる時に、アダムが罪を犯したその結果を身に受けています。そこで、全能者である神と自分との間に断絶を感じます。そこでかつてのヨブと同じように仲介者、保証人を求めているのです。それが肉体を取られたキリストです。主は人となってくださり、その肉体において私たちと一つになってくださいました。そして私たちにこの弱さの中において、なおのこと神を知ることができるようにしてくださいました。

38:15 何を私は語れましょう。主が私に語り、主みずから行なわれたのに。私は私のすべての年月、私のたましいの苦しみのために、静かに歩みます。38:16 主よ。これらによって、人は生きるのです。私の息のいのちも、すべてこれらに従っています。どうか、私を健やかにし、私を生かしてください。38:17 ああ、私の苦しんだ苦しみは平安のためでした。あなたは、滅びの穴から、私のたましいを引き戻されました。あなたは私のすべての罪を、あなたのうしろに投げやられました。38:18 よみはあなたをほめたたえず、死はあなたを賛美せず、穴に下る者たちは、あなたのまことを待ち望みません。38:19 生きている者、ただ生きている者だけが今日の私のように、あなたをほめたたえるのです。父は子らにあなたのまことについて知らせます。38:20 主は、私を救ってください。私たちの生きている日々の間、主の宮で琴をかなでよう。

15 節辺りから、病が回復していっています。それを歌っています。死から救われたことは、罪か

ら救われたことと同義にしています。罪から死が入ってきたからです。そして、彼が生きていたいと願ったのは、この地上で賛美を捧げたいからと言っています。そうです、ヒゼキヤはその純粋な動機、清い動機からもっと生きていたいと願っていたのです。主を賛美して、主の宮で琴を奏でること、主がなされた御業を、アッシリヤから救ってください、また死から救ってください、その印として日時計の陰の逆戻りまで与えてください、そのことに対する感謝をずっと主に捧げていたいと願っています。

38:21 イザヤは言った。「ひとかたまりの干しいちじくを持って来させ、腫物の上に塗りつけなさい。そうすれば直ります。」38:22 ヒゼキヤは言った。「私が主の宮に上れるそのしるしは何ですか。」

この発言は少し逆戻りです。癒しがまだ与えられなかった時に、イザヤが干しいちじくを腫物の上に塗りつけなさいと言って、それで彼がいやされ、そして主の宮に入れる印を求めて、それから日時計の奇蹟があります。けれども、ここで強調したいのは、彼の眼中に何がいつもあったのか？ということです。主の宮なのです。主のところに行くこと、ダビデが主の宮に住まうこと、これをただ一つ願っていると言った、その思いをヒゼキヤは抱いていました。

## 2B バビロン捕囚の予告 39

ところが、39章において彼の心に芽生えた高ぶりを見るのです。

39:1 そのころ、バルアダンの子、バビロンの王メロダク・バルアダンは、使者を遣わし、手紙と贈り物をヒゼキヤに届けた。彼が病気だったが、元気になった、ということを知ったからである。

アッシリヤが世界を制していた時に、アッシリヤは両面で戦っていました。すなわち西側でも東側でも戦っていました。西にはユダを始めとする国々がありますが、東ではまだネブカデネザルが出てくるはるか前の、バビロンがありました。メロダク・バルアダンはアッシリヤに対抗して戦っていましたが、ヒゼキヤが西で勝利を収めたことを聞いたのです。それで病が癒されたことをお祝いするために贈り物を持ってきた、と言っていますが、ここに「手紙」も含まれているのです。これは単なるお祝いではなく、東西における反アッシリヤ連合の誘いだったのです。

39:2 ヒゼキヤはそれらを喜び、宝庫、銀、金、香料、高価な油、いっさいの武器庫、彼の宝物倉にあるすべての物を彼らに見せた。ヒゼキヤがその家の中、および国中で、彼らに見せなかった物は一つもなかった。

ヒゼキヤは、ここでとんでもない過ちを犯しました。イザヤを通して彼は繰り返し、シオンにこそ救いがあるという言葉聞き、それでもエジプトに助けを呼ぶという過ちを犯し、そしてへりくだって、主の前で祈って、主が憐れんでくださったのです。それだけでなく、病が癒された時は主がそれを奇蹟的に直されただけでなく、日時計の逆戻りという印までも与えられました。それにも関わらず、

彼はこの連合に気持ちがいちが傾いたのです。彼は自分の家にあるこれらあらゆる宝物を見せました。この世の基準では、このことは当然行なうことです。自分たちがいかに力を持っているかを相手に見せることによって、同盟や連合が結べるというものです。

しかし、主の民はそのようなことを行ってはいけません。ヒゼキヤは、このような使者に対してペリシテに対して言ったように語らなければいけませんでした。「異邦の使者たちに何と答えようか。『主はシオンの礎を据えられた。主の民の悩む者たちは、これに身を避ける。』(14:32)」彼は主の宮に入ることをせず、自分の家を見せびらかしてしまいました。主に付くのではなく、自分自身に拠り頼んでしまったのです。

39:3 そこで預言者イザヤが、ヒゼキヤ王のところに来て、彼に尋ねた。「あの人々は何を言いましたか。どこから来たのですか。」ヒゼキヤは答えた。「遠い国、バビロンから、私のところに来たのです。」39:4 イザヤはまた言った。「彼らは、あなたの家で何を見たのですか。」ヒゼキヤは答えた。「私の家の中のすべての物を見ました。私の宝物倉の中で彼らに見せなかった物は一つもありません。」39:5 すると、イザヤはヒゼキヤに言った。「万軍の主のことばを聞きなさい。39:6 見よ。あなたの家にある物、あなたの先祖たちが今日まで、たくわえてきた物がすべて、バビロンへ運び去られる日が来ている。何一つ残されまい、と主は仰せられます。39:7 また、あなたの生む、あなた自身の息子たちのうち、捕えられてバビロンの王の宮殿で宦官となる者があろう。」

このことが起こりました。宝物倉の中にある者は、605年、597年、そして586年のバビロン捕囚によって成就しました。それから王の息子たちが宦官になることについては、ダニエル書において成就しています。ダニエル、ハナヌヤ、ミシャル、そしてアザルヤです。

39:8 ヒゼキヤはイザヤに言った。「あなたが告げてくれた主のことばはありがたい。」彼は、自分が生きている間は、平和で安全だろう、と思ったからである。

ヒゼキヤがシェブナのように、自分の今の生活のことしか考えていないことは非常に残念です。彼の引き延ばされた十五年間は試された十五年間であります。この間にマナセが生まれました。彼はユダの王たちの中で、もっとも主の前で悪を行なった者です。子どもを火の中にくぐらせたりして、かつてのエモリ人よりも悪くなったと書かれています(2列王 21章)。そして、このマナセが行なったことで、ユダに対する神の怒りは定まりました。マナセの孫にヨシヤが生まれ、彼も宗教改革を断行しましたが、すでに遅し、でした。その裁きの時は引きのばされましたが、裁かれることには変更はなかったのです。

今、自分自身がどの家にいたいのか考えてみましょう。絶え間なく、どんな時にも主の尋ね求め、主に拠り頼む、主の家の中に入って行くのか？それとも、自分の家の中にあるもの、自分の能力や財産、自分の欲望、これらのものを開示する道を歩むのか？